
旅人と刀の男

カフス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

旅人と刀の男

【Nコード】

N2927J

【作者名】

カフス

【あらすじ】

次の国に入った旅人。そこで盗んだ刀が引き起こす2つの出来事。

（前書き）

微グロ表現がありますが、もはやグロというものの自体が苦手な方は、部屋を明るくして好きな曲でも聴きながら読むと幸せになります。

街の大通り。

「是非お手合わせ願いたい」

「謹んでお断りします」

腰に長い東洋の刀を吊った男にいきなり果し合いを申し込まれたので俺は丁寧断った。

「なぜです!？」

えー・・・・・・・・？　なんかいろいろとめんどくさいし、それに、
「あなたの武器・・・・・・・・見たところその刀、だけですよね・・・・・・」

「そうですよ。ですから、私の剣の腕前と旅人殿の銃の腕前、どちらが上か確かめたいのです」

「はあ、そうですか・・・・・・・・」

なんでこう変な人間によく遭遇するのか。これはちょっと真剣に考えなければいけなさそうだ。

「しかしですね。俺は別に銃の腕に自信があると言っわけではないんですけど」

「そんなことはどうでもいいのです!」
・・・・・・・・。良かねえ。

「正直に言いましょう、私は一度銃使いと戦ってみたかったです」
「刀で、ですか・・・・・・・・?」

なんとという自殺志願者。

「しかし・・・・・・・・、刀のあなたは峰打ちとかで殺さない事もできますが、銃の私は器用に殺さないということはできませんよ?」

「ええ、ですから私は殺すつもりでやるので旅人殿も私を殺すつもりで撃ってください」

なんとという迷惑な自殺志願者。

ここで逃げてもよかったが、残念な事に移動用の自動二輪車は宿

に止めてきていた。

「・・・・・・・・ここで・・・・・・・・逃げたらどうなります?」

一応聞いてみる。

「逃げることにすら無理だと思います」

ですよねえ。前の男の後ろに2人、俺の後ろに4人、隠れてるが
気配の隠し方が素人だ。

もちろんそれも押し切っていくことも可能だが、1人殺すのと4
人殺すのだと1人のほうが楽だ。

「わかりましたよ・・・・・・・・」

「本当ですか!」

「はい・・・・・・・・」

仕方ない。別にもう盗みは働いたので国を出るところだったから
いいだろう。

ため息をついてコートに隠されていた腰に吊っていた銃を取る。

銃身が短く、全身わずか85cmの全自動式ライフル。全体が黒
光りし細長く、銃口の下部分にはこれまた黒く反射処理がされた
小刀。『騎士の銃』と呼んでいる。

「それでは旅人殿、いきますぞ」

そう言つて刀の男(そう名づけた)は刀を両手で前に突き出すよ
うに構える。

「まあ・・・・・・・・、すぐ終わらせようかな・・・・・・・・」

銃を片手で持ち刀の男に向ける。そして、

タアッ!

ガキン!

・・・・・・・・。

タアッ!

キン!

・・・・・・・・弾を弾いたぞこの刀の男。

「ふふふ、どうですか旅人殿?」

「ああ、すばらしいよ・・・・・・・・」

「ありがとうございます」

さて、ちよつと本気出そうかな……。盗みが本職だとい
うのに、こんなところでなにやってるんだろう。

「さあ、どうしましたかな旅人殿？」

「戦いの最中に喋ると――」

タタタァーン！ 続けて3発撃つ。ラピッドショットともいう。

「無駄アツ！」

やはり刀で1発2発弾かれる。だが、刀の男が3発目を弾く頃
は、

「ぬう！？」

刀の男の刀と銃が重なる。金属同士がぶつかる音が頭に響く。

「――命を落としますよ」

最後に銃の先端の黒い小刀を引き抜き、刀の男の喉に突き刺す。

そのまま小刀を水平にして横に引き抜く。

刀の男は首から赤い噴水を噴きながら地面に倒れる。

「ふう、ひとつの国で必ず1殺しなきやいけないんだろうか……

……？」

とりあえず刀の男の懐を探り金貨を2枚見つけて盗っておいた。

「あなたたちもこの人ようになりますか？」

そう言つと周りに隠れていた（つморい）刀を吊つた男たちは簡
単に逃げていった。

「何でこうなつたのか、よくわからんよ本当に」

国に入つて4日目。古めかしい東洋風の屋敷に若い旅人はいた。

しかし別に招待されたとかではなく、盗みのための不法侵入だ。

「刀……はすぐに盗まれたとバレるから、国から出るまで
苦しいしなあ……。いや、やはり刃物は国によっては売れる・

「……けど……なあ……」

などと旅人は広い屋敷の少し狭い感じのする畳座敷で思案していた。ちなみに座敷の外庭が見れる縁側には2人の男が床に突っ伏していた。

「むむう……仕方ない。この小刀だけでいいか……」

「
やがて手に持っていた長刀と小刀のうち、長刀だけを名残惜しうに刀置き台に戻す。」

その時、どこからか「盗つ人だー！」と言う声が聞こえた。

「やれやれ、撤収しますか……いや、」

旅人は腰に差しかけていた小刀を引き抜き手に持つ。

「試し斬りかな」

屋敷の縁側のきれいな廊下から小刀を持った男たちがドタドタと5人走ってくる。

男たちは旅人のいる畳座敷に入ってきて、旅人は刀を持った男たち5人に囲まれる。

「今すぐ盗った物を返せば命だけは助けてやる」

男たちのうち1人がそう聞く。

「そうですか。しかし命だけはってことは、手足の一本三本もっていかれそうなので返しません」

旅人は鞘を抜いた小刀を左手でしっかりと握り、まるで殴り合いをする時のようなポーズをとる。

「……ん？ 貴様ツ、その刀は！」

男たちは旅人が持っている小刀に気付くとざわめき始める。

「くそつ、なんとしてでもその刀返してもらっぞ！」

「ありや？ なんか呪いでもついてんのかねこれ……おつと」

突然男の1人が背中から斬りかかってきた。

おもわず前に踏み出して刀を避ける。そこにまた1人が首を狙っ

て刀を水平に振ってくる。

旅人はすばやく身体ごと屈んで、その状態から右手を床につき、右足だけをまっすぐ横に伸ばす。そして片手で身体を支えたまま逆立ちのような状態になって、右足を思いっきり身体の後ろに回すように振り下ろす。そのままその遠心力を利用して、両足を広げながら器用に1回転、2回転。その際に男たちの足に引っ掛けて床に倒す。

なおも男たちは立ち上がろうとするが、その時にはもう旅人は立ち上がり左手の小刀で2人の男の首を切り裂いていた。

器用に返り血がつかないようにしているのか、立ち回り方が速い。旅人は3人目に斬かかりあっさりと片付ける。

残った2人はうわああと叫びながら飛び掛ってくる。

だが2人の男は旅人に斬られるまでもなく後ろに吹っ飛ぶ。

いつの間にか旅人の手には、やけに短いライフルが握られていた。「うん。いい切れ味だった」

その様子を屋敷の堀から見ていた男がいた。

男は旅人が屋敷に盗みに入る前に、いま旅人が持っている刀を盗もうとしていた。

しかし男は旅人の戦いを見て考えを変えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2927j/>

旅人と刀の男

2010年10月8日15時13分発行